来さっせぇ 奥多摩 《第50号》
平成30年7月15日
(一社)奥多摩観光協会

観光立町のさらなる推進をめざして

奥多摩町長　河村　文夫

2018年「百尋の滝」

春　5月15日

冬　2月13日

一般社団法人奥多摩観光協会の機関紙「来さっせぇ」発刊５０号おめでとうございます。また、奥多摩観光協会の役員皆様はじめ会員の皆様には、日頃より、当町の観光推進にご協力を、賜り、あらためまして御礼申し上げます。特に、貴会の「名人・達人観ガイドの様には、昨年、１１月の町の功労者表彰式での産業表彰の受賞、誠におめでとうございます。

さて、昭和３０年４月に古里村、氷川町、小河内村の一町二村が合併し誕生した奥多摩町は、町制施行以来『観光立町』を標榜しておりますが、管理釣場やキャンプ場などのレジャーや近年の登山ブームもあり、西多摩広域行政圏協議会実施の観光客数調査において、昨年平成２９年中は２１２万人超と推計され、前回平成２４年中の約１７６万人を大きく上回りました。

町といたしましても、この間、平成２７年には町制施行６０周年記念事業の一環として、全国「第２８回日本鍾乳洞サミット」を日原鍾乳洞のほか北は岩手県、南は鹿児島県の全国９つの鍾乳洞・関係団体の皆様が一堂に介して当町で開催し、全国に日原鍾乳洞を PR したことをはじめ、同年には国民宿舎「鳩の巣荘」を改修し、新たに「奥多摩の風はとのす荘」（客室数２７室定員９９名）としてオープンし、森林セラピー事業の拠点、さらには２年後に迫った２０２０年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、インバウンド観光の拠点として、町としても利活用を推進しているところであります。また、昨年１０月には、神津島村との友好交流協定を、小中学生の洋上セミナーや観光協会による交流をさらに発展させ、両町村の住民皆様相互の交流の契機となることを念願し、協定を締結したところであります。

一方、「日本一観光用公衆トイレがきれいなまち」を目指し、トイレの洋式化やクリーンキーパーによる質の高い清掃にも取り組んでおり、去る5月１７日に来町された小池都知事に、その取り組みを紹介し、また、東京都の多摩・島しょの自然を活用した新たな体験型エンターテイメント創出事業とモデル事業として、奥多摩湖畔（川野地内）の町有地を活用して本年３月にオープンしたグランピング施設「Circus Outdoor TOKYO」（サーカス･アウトドア･トウキョウ）を視察いただきました。

当町の様々な観光振興施策のさらなる推進につきまして、東京都の支援はもちろんのこと、町内においては、一般社団法人奥多摩観光協会をはじめとする関係団体の皆様のご理解・ご協力が不可欠であり、あらためまして、引き続きさらなるご協力をお願い申し上げ、「来さっせぇ」発刊５０号記念の挨拶といたします。

奥多摩山歩き
～ワンポイントアドバイス～

奥多摩にもまた暑い夏がやってきた。この季節の山登りについて、気象の把握と地形図については、既に過去のシリーズで取り上げてきた。今回は登山の装備品にスポットを当ててみたい。

本来なら登山靴から始めるべきであるが、今回は特にザック(バックパック)に触れてみる。

まずは、上段右端のデイパック20㍑前後～下段左端の75㍑程度までどれを選ぶかは登る山毎に異なる。日帰りなら30㍑前後、一泊2日の小屋泊りなら上段右から3番目35㍑～下段右端45㍑程度が適切であろう。

尤も、セパレートタイプの雨具・ヘッドランプ・地形図・飲料水・食料や行動食・救急用品・小物類(カメラや携帯電話等)を含め、それぞれをスタッフバックに小分けしてからコンパクトに収めたい。

同じザックでも、パッキング術の如何によっては疲れが大きく異なる。重いものは背中に近く、軽い物は背中から離し、中間には中程度の物を入れたい。また、ザックの下の方には比較的軽い替えの衣類等を詰め、上に向かって重い物を詰めていくのが原則である。工夫次第で写真右のごとく腰荷とならない背負い方で、快適な登山を追求したい。

年齢と共に重さが身に染みる。軽くてコンパクト多少値段は張っても丈夫でより良いものを揃えたい。

(冨士光男)

夏から秋　奥多摩山歩き
～イベント案内　8月から10月～

No.14　8月　9日（木）鶏冠山（黒川鶏冠山）
No.15　8月21日（火）御岳山のレンゲショウマ
No.16　9月　5日（水）棒ノ折山（棒ノ峰）
No.17　9月18日（火）　山里歩き（多摩川右岸を歩く）
No.18　9月26日（水）御前山（ステップ雲取山）
No.19　9月28日（金）ﾌｯﾄﾊﾟｽ（海沢・SAKA 郷土料理）
No.20　10月3日（水）海沢三滝
No.21　10月15日（月）雲取山（お祭り～ヨモギ尾根）
No.22　10月18日（木）松姫峠～奈良倉山と鶴寝山
No.23　10月26日（金）山里歩き（天空の里、峰集落）
No.24　10月30日（火）大岳山 海沢渓谷～御岳随身門

昔、奥多摩は神奈川県だった？

明治４年、廃藩置県が実行され、今まで藩だったものが、県と府になった。当初、多摩郡は東京府と入間県に属することが決まった。ところが、神奈川県は、横浜を中心に外国人居留地があり幕末の開国以降、外国人はそこに住むことが義務づけられ、そこに外国人が自由に外出できる遊歩地が設けられた。多摩川右岸、八王子、日野などが含まれた。そのため政府に、外国人遊歩地を管轄するために、その地域を神奈川県にしてほしいと願い出て、政府はその願いを聞き入れ、東京府に対して多摩郡を神奈川県に引き渡すよう命じた。

神奈川県の要求は遊歩地の部分だけでしたが、多摩郡全体が神奈川県に属することになった。(明治５年には現在の中野区、杉並区は東京府へと移管された)そして、明治26年２月、東京市は水源の保護、及び水の確保のため、また、森林濫伐の取り締まりのため、政府に三多摩を東京府に戻すよう要求した。同年４月１日、奥多摩を含む三多摩は東京府に移管された。法案提出から移管実施まで、わずかひと月あまりのことでした。

(小峰一郎)

明治11年から26年の神奈川県と東京府

奥多摩の地質　その1

1.　岩石の観察場所

先に奥多摩の地質を構成する岩石について紹介します。「昔の人達は山の奥深い場所にある金山をどうやって見つけたのか？」と尋ねられたことに対して、「まずは河原にある石を調べて、例えば金鉱石を含む特有の石であるプロピライト等の手掛かりになる情報が得られれば、上流の枝沢（えださわ）を精査していって、金鉱床にたどり着いた。」と返答したものです。河原の石を調べると奥多摩の山地を構成している石のほとんどを観察できます。観察の場所は、例えば多摩川と日原川の合流地点より下流の方が、両水系が運んだ石を一箇所で見るのに適しているでしょう。

2.　成因別岩石

奥多摩の石の種類はそれほど多くはありません。一部火成岩と熱変成岩はありますが、ほとんどが堆積岩で成因別に以下に分けられます。

(a) 主として生物の遺骸が海底に堆積した石灰岩、チャート

(b) 陸の砕屑物が堆積した、砂岩・泥岩・頁岩（けつがん）・礫岩

(c) 海底火山活動による輝緑凝灰岩（きりょくぎょうかいがん）（シャールスタイン）

(d) 火成岩：石英閃緑岩（せんりょくがん）、場所が限定されますが、蛇紋岩（じゃもん）・玄武岩

(e) 変成岩：ホルンフェルス

(f) その他（希少）：マンガン鉱石、菊花石

3.　主たる岩石の特徴

① 石灰岩: Lime stone　（資源対象の場合は石灰石）

炭酸カルシウム（$CaCO_3$）からなる微細な方解石の集合体。モースの硬度は３で軟らかいことから、角がとれて丸っこいものが多い。釘でこすれば容易に傷がつくし、石が塩酸などの酸と化学反応して炭酸ガスの泡を発生し、融雪剤として使用される塩カルと水ができます。

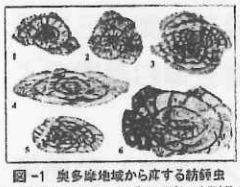


図-1　奥多摩地域から産する紡錘虫

（奥多摩町の日原小川谷、日原大沢産）

東京都奥多摩地底の地質：東京都土木技術研究所 2003.03

奥多摩には天祖山や日原等にある（図-1）からなるものと、ウミユリ（図-2）、サンゴ類（図-3-1、3-2）や層孔虫等を含む鳥の巣（式）石灰岩があります。日原地区では大規模な鉱床をなしており、採掘の対象としています。

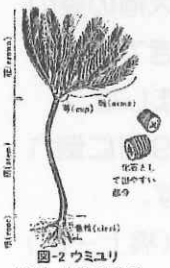


図-2 ウミユリ

図 3-1 ハチノスサンゴ

図 3-2 クサリサンゴ

石灰石は、セメント原料、溶鉱炉での鉄鉱石からの不純分除去剤などに。またこれを焼いて生石灰にし、さらに消石灰にしますが、これらは鉄鋼の精錬用をはじめ、製紙・ゴム・樹脂等、ゴミ焼却炉の脱塩剤、排ガスからの脱硫剤、土質改良剤、中和剤等々の用途があり、私たちの生活に欠かせないものです。

石灰岩の岩盤は身近な所では、奥多摩むかし道の白髭神社や日原鍾乳洞付近などで見ることができます。

② チャート：Chert　硅石とも呼ぶ。成分は SiO_2 で要するに石英。モースの硬度は７で比較的硬く、釘で傷はつかない。色は白色・緑色・赤褐色や黒色のものなどがあり、ハンマーで叩くと火花を発し、卵が腐った様なにおいがします。割れた面はガラス質で、水で濡らすと透明感が出て分かりやすい。放散虫（ラジオラリア）の珪酸質の殻や骨などが、遺骸として堆積して固まったもので図-4 にその例を示します。チャートは鳩ノ巣渓谷の他、奥多摩の至るところで見る事ができます。

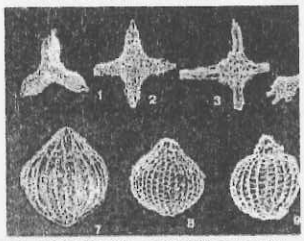


図-4 奥多摩のジュラ紀放散虫化石例

東京都奥多摩地域の地質 東京都土木研究所2003 改変

③ 砂岩：その名の通り Sand stone。砂が固結したもので粒粒（つぶつぶ）感があります。

④ 頁岩（けつがん）（shale）：泥が固結した泥岩（Mud stone）が圧力で　更に固結し、扁平状に割れ目が入っています。

⑤ 礫岩:2mm 以上のチャートや砂岩等々の石の粒が、泥岩や砂岩に取り込まれて固結したものです。

⑥ 輝緑凝灰岩：火山活動で発生した火山灰が固結したもの。緑色や赤褐色のものがある。釘で傷がつきます。

⑦ 石英閃緑（せんりょく）岩：石英、灰長石、雲母、角閃石などからなり、花崗岩よりも黒味が増した石で、マグマが地下深いところでゆっくり固まった深成岩。三頭山や、山のふるさと村の岫沢（くきざわ）で見られます。

⑧ ホルンフェルス：石英閃緑岩により、地下深部で泥岩などが熱変成を受けて“ヤケド”をし、硬さを増したもの。三頭大滝付近で見られます。ハンマーで割って、できた面は貝殻状になります。

※ 本来なら、岩石をカラー写真で示したかったのですが、紙面の都合で掲載していません。奥多摩ビジターセンターに上記岩石が置いてあります。手に取って、見て、肌で感じて下さい。　（次回に続きます。）

＜参考文献＞○多摩川とその流域の自然 7～8 頁橋上一彦氏（青梅市）○日本列島ものがたり井尻正二（築地書館）　○奥多摩町誌

（本渡 康隆）

奥多摩の野鳥
～渡りをする鳥～

今回は鷹類のサシバを取り上げました。

サシバ：ワシタカ　目：ワシタカ科、夏鳥（指羽）

L♂47 ♀51cm　W103～115cm

細くて白い眉、上くちばしは下に曲がり鋭い、頭から顔は青灰色味のある褐色、目は黄色、つばさは濃い茶褐色、下面は白褐色と黒褐色。

サシバは渡りをする代表的な鷹で本州、四国、九州に夏鳥として飛来します。そして日本列島で繁殖します。動物食でありカエル、トカゲ、ヘビ、昆虫などを捕食します。又比較的よく鳴きます。「ピックイー」と鳴き、ピックイ鷹と呼ばれる事もあります。サシバという呼び名は「まっすぐに飛ぶもの」という意味らしく鎌倉時代から使われて来たようです。捕食の際、獲物を追って直線的に飛ぶからともいわれ、タカ類の中では獲物に向かって直線的に飛ぶ代表として知られています。

サシバの特徴として秋の渡りが挙げられますが、渡りのルート上にある山間部の峠などでは群れが谷間から帆翔しながら上昇しタカ柱状態になり、気流を利用し一斉に南を目指し渡っていく様子は壮観です。多い時は１日数百羽～数千羽にもなるようです。

最近は日本列島に渡って来る数も少なくなり、１万羽程度といわれていますが、2013年は久々に３万羽を超えて渡って来たといわれています。ただサシバの個体数が減少傾向にある事は事実のようで、どこまで回復するかは東南アジア方面の環境によるところが大きいようです。

日本列島に今１～２万羽のサシバが繁殖のために活動していますが、あたたかく見守っていたいし、サシバよガンバレとエールを送りたい気持ちでいっぱいです。

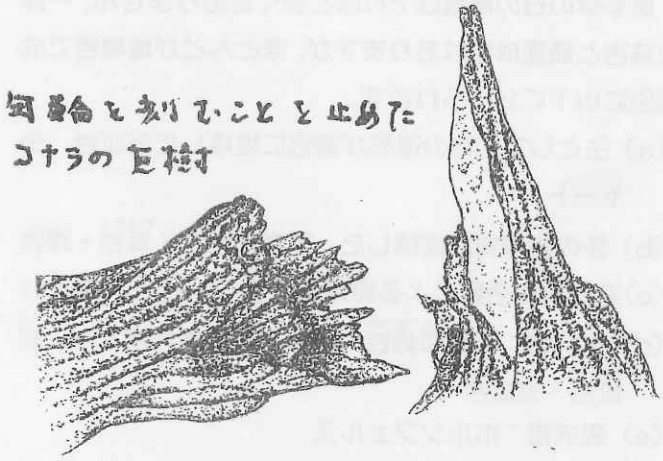
（畑幸夫）

サシバ：ワシタカ科

by 大澤　新次

奥多摩樹木雑考
～大　楢　哀　歌～

御岳神社への裏参道にあたる大楢峠に生えていたコナラの巨樹（故に大楢と呼ばれた）が倒れたということを聞いていたので、４月下旬峠を訪れてみました。そこで目にしたのは、倒れても生を全うしたものが見せる傲然と気を漲らした大楢の姿でした。すぐになぜ倒れたのだろうという疑問が湧きました。樹木は大木になるほど枝の数が増え、それぞれの揺れの違いが互いの枝の揺れを打ち消し合うので、幹が大きく揺れることはありません。ですから、単純に強風だけで折れたとは考えにくいのです。



そこで残された巨大な株のまわりを巡ってみますと、はがれた幹の肌が白くなっていました。コナラの材の色にはない異常な白さに、大楢を倒したのは勢いが衰えた組織にしのび込んだ腐朽菌の仕業と思いました。

倒れた巨樹に取り残された株のすき間に生えた一株のツリバナの稚樹が、たくさんの蕾をつけていました。それはあたかも倒れ去った大楢を弔う花のようでした。倒れた大楢の幹を両側から視野に納めて立つ２本のスギは、大楢を悼む墓標のようでした。

昨年の秋に葉を落としてリフレッシュした落葉樹の新緑が、深まりゆく春の陽光を受けてきらめいている姿と、黒々と静かに横たわる大楢の姿のきびしいコントラストに、森の中で起きている生の流転を肌で感じながら峠をあとにしました。

この大楢峠のコナラは２０１５年の９月に倒れたとレインジャーの方から聞いています。

（橋上一彦）

とっておきの山歩きガイド

～山里歩きの楽しみ～
あなたなら何をお願いしますか

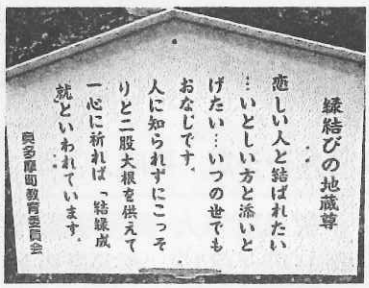
奥多摩の山里歩きで出逢う路傍の石仏のうち、馬頭観音を紹介します。どれも優しい顔つきなのでお地蔵さまと間違えられます。見分け方のポイントは、頭の上に馬の顔があること。

本来、馬頭観音は、左の写真のように三眼八臂の恐ろしい顔「憤怒相」で手に剣や斧などの武器を持っています。人々は、魔障を除き、病気退散や長命を願いました。

かつて、奥多摩での運搬手段の主役は馬だった時代があり、民間信仰と結びついて馬に対する感謝の気持ちや供養の心が刻まれた優しい顔の馬頭観音が多く残されています。

４月２３日に瑞穂五小の子供たち、１００人ほどと奥多摩自然ハイクで氷川渓谷遊歩道を歩きました。大人相手と違い、子供たちからのどんな質問にも対応できるようにと、奥多摩町発行の山里歩き絵図を念入りに読みなおしました。おかげで№13「常盤」の説明にある石仏は、道祖神ではなく、明和六年（1769）と寛政六年(1794)馬頭観音であることが判明しました。

ついでに、奥多摩むかしみちにある縁結びの地蔵尊、実はこれも馬頭観音だったのです。



縁結びの地蔵尊

恋しい人と結ばれたい
…いとしい方と添いと
げたい…いつの世でも
おなじです。
人に知られずにこっそ
りと二股大根を供えて
一心に祈れば「結縁成
就」といわれています。

奥多摩町教育委員会

それとは知らずに解説にあるようにこっそり二股大根を供えた若者は、今どうしているでしょうか。

さらに、山里歩き絵図№１７「中山」の「牛頭観音」についても、表示板の説明には、「ごず」とルビがふってありますが、「ゴズ」と読む場合は、仏教用語で牛の頭をした地獄の番兵のことで、運搬手段としての牛とは何ら関係がありません。

あくまでも、個人的な見解としておきますが、写真の牛頭観音は、供養の相手が牛なので石屋さんに頼んで石像の頭部に牛頭を彫ってもらったのではないでしょうか。

牛頭観音様

明治三十年・小河内探勝記・露木敬身（漢学者）によれば「…牛馬の背荷を輸出しての帰途に通う三十余頭…岩壁に付して…通過を避く…婦女の牛を使役…多し…」とあるごとく馬よりは小数であったが牛も使役されていました。牛頭観音様の造立は珍しい。牛馬の息災を祈りました。

奥多摩町教育委員会

ちなみに、山のふるさと村には、文字塔の「牛馬観音」があります。蛇足ですが、何でもありの世の中、神奈川県には、豚頭観音もあるそうです。

今回は、古道歩きで出逢う石仏のうち、もっとも山村での信仰が篤い馬頭観音を紹介しました。馬頭観音は、病魔退散から牛馬供養へ。そして現代では、交通安全の守り本尊として、さらには、競馬にまで及んでいます。

最後に私の好きな馬頭観音を紹介しておきます。

頭上の彫り物は、犬のようにも見えますが、可愛らしい仔馬です。山里歩き絵図をたよりに探してみてください。ヒントは、旧小河内村です。どこかで出逢うことでしょう。

山里歩き絵図・全２２集は、奥多摩駅前の観光案内所や町役場等でケースに入れて無料配布していますのでご利用ください。

（岡崎　学）

奥多摩地域情報局

奥多摩夏祭り情報

8月 4日	海沢　山祇神社　神庭の神楽	
5日	海沢神社　獅子舞	（寿楽荘、体験農園広場）
11,12日	奥氷川神社　獅子舞	（11日　奥多摩花火大会）
	南氷川のお囃子	
16日	境　白髭神社　獅子舞	（神社後、境集会所広場）
19日	鳩ノ巣　熊野神社　獅子舞	
	白丸　元栖神社　獅子舞	
26日	大丹波　青木神社　獅子舞	
	小留浦　山祇神社　獅子舞	
	栃久保　根元神社　獅子舞	
9月 2日	日原　一石山神社　獅子舞	
9日	小河内　原　獅子舞	（小河内神社、ふれあい館）
	川野　獅子舞	（小河内神社、ふれあい館）
	峰沢（くぼさわ）　鹿島踊り	（小河内神社、ふれあい館）

セミは昆虫の中で最も寿命が長い？

夏の暑さをさらに増幅させるアブラゼミの声、でも、セミが鳴かないと夏らしくないですね。今回セミについて調べてみました。

日本には約30種類、世界には約1600種類のセミがいます。鳴くのはオスだけで、結婚相手としてメスを呼び寄せるためです。夏から秋の間にメスは木の上に卵を産みつけます。そしてその卵は翌年の6～7月にふ化（その年の秋にふ化するものもいます）し木の上から地下に潜ります。それから約4～7年の長い地下生活に入ります。幼虫は長い口吻を木の根にさしこみ、道管より樹液を吸って成長し、長い地下生活のうちに数回の脱皮をおこないます。根の樹液は幹の樹液と違い、栄養分が少ないため幼虫の成長するスピードが遅く、したがって結果的にながーい地下生活になります。

セミが地上に出てきて成虫として生きている時間はよく1週間って言われているけど実はもうちょっと長生きします。だいたい2～3週間生きるよ。

セミの鳴き声は、体の中にある発音膜という、まくが筋肉の伸縮するたびに震えて音を出します。その音が、お腹の気のうという空洞の中で響き、大鳴き声になります。1秒間に数千回も伸縮して鳴き声を出すそうです。　（小峰　一郎）

「来さっせぇ」卒業

2006年4月創刊から2018年3月まで編集委員として努めて参りました。当初は、勝手がわからず戸惑ってばかりでした。先ず覚えたのは、年4回発行に合わせて編集会議のサイクル。発行に至るまでに、企画・校正・仕上げと3回の編集会議。日程が決まると、会議室予約・原稿依頼する。

創刊当初は、表紙は「絵」と「季節だより」奥多摩の自然や伝統芸能。2頁にイベント紹介。3～4頁「奥多摩登山考」青梅警察署山岳救助隊副隊長金邦夫氏の救助作業日誌。後に「奥多摩登山考」として三冊発行されました。原稿受け取りに拝島駅まで行ったことも良い思い出となっています。5頁「奥多摩昔語り」「山の花だより」「奥多摩歳時記」6頁「ガイドだより」「施設案内」「イベント案内」という内容でした。尚、創刊号の表紙を飾ったのは「カタクリの花」作者は金邦夫氏。そして、ガイド安藤修二氏の奥多摩にちなんだ彫刻画は味がありました。

原稿依頼は大変でした。電話で依頼するのですが、断られても粘ったなあ。その節は、大変有難うございました。後に、シリーズを入れました。またお客様が会員制となり、会員様に寄稿依頼することになり読者様に大好評でした。取材の思い出として中山・青目立ち不動併設の食事処に勤めていた人に会いに行き、ドキドキしながらインタビュー。地元委員Hさんと一緒だったので、快く引き受けてくださって安堵したこと。（現在食事処閉店）

寄稿文が届くと校正会議。委員で、一つひとつ音読して確認していく作業でした。当初は、案内所の地下室で暗い部屋での会議でした。時々、羽村や青梅でしたこともありました。後に、奥多摩町の福祉会館を、使わせていただくようになり快適になりました。仕上げ会議は、内容を確認して発行日までに事務局に印刷依頼して終了。長い間遂行できたのも、支えてくださった方々のお蔭でした。有難うございました。　（武田和代）

次号発行予定：平成30年10月15日

発行　一般社団法人 奥多摩観光協会
住所　〒198-0212　奥多摩町氷川210
電話　0428-83-2152 FAX 0428-83-2789
編集　名人・達人観光ガイドの会